

<b>Title</b>	十五世紀ヨーロッパにおける標題紙の出現とその発展
<b>Author(s)</b>	若松, 昭子
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢,18(3) : 325-338
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=89">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=89</a>
<b>Rights</b>	この PDF は図版を収録していません。

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE



バトラー (Pierce Butler) は、20世紀初頭のシカゴ大学大学院図書館学研究科の開設時教授スタッフの一人である。彼は、書誌学者として学識史、書物文化史、書誌学などの科目を担当するとともに、学識の伝達再生機関という視点から図書館学を論じた。彼の後年の論文は、戦後間もないわが国の図書館学教育の中でもテキストの一つとして取り上げられ読まれていた。1920年から1930年代の約13年間、バトラーは、ニューベリー図書館において、印刷史を主題とするウィング・コレクション (正式名は Wing Foundation) のキュレーターを務めた。彼は、特に印刷史の出発の時期にあたる15世紀後半の書物文化に関心を抱き、人文学分野の研究資料として、歴史的にも、学術的にも、芸術的にも価値が高いと思われるインクナブラを収集したいと考えた。そこで、厳密な収集方針と選書基準を設けてインクナブラの計画的な収集に乗り出した。

現在、ウィング・コレクションは幅広く多様な資料で構成され、15世紀から20世紀を通して過去から現在までの印刷の歴史を辿ることができるようになっている。なかでも、バトラーによって重点的に収集されたインクナブラは、その厳選された資料によって、書誌学や書物史分野のみならず、古典学、宗教学、歴史学などの分野の研究活動を支えるものとして高い評価を受けている。

ニューベリー図書館は、バトラーの企画によって、1925年および1930年の2回にわたり、大がかりなインクナブラ展示会を行った。先に筆者はそれらの展示会の構成内容を調べ、展示会で示そうとしたバトラーの意図を考察した。そこから次の事柄がわかった。両展示会においてバトラーは、当時急速に発展しつつあった分析書誌学の最新の研究成果をとり入れ、印刷術の普及にともなって書物が次第に近代的な形態へと変容する様子を再現しようとした。例えば、標題紙、目次、ページ、巻末索引、通し見出などの考案、ゴシック活字からローマン活字への推移、版の小型化など、15世紀後半に起こった書物形態の変化の諸相をインクナブラという実例を用いて系統的に示そうとしたのである。

しかし、当時の展示会用目録はわずか17ページの簡略なものである。そのうえ、当展示会に関する記事や情報は他に残されていない。そのため、バトラーが示そうとした書物形態の変化の諸相を具体的に思い描くことは困難であった。幸い筆者は、2004年夏および2005年夏の計2回にわたり、ニューベリー図書館におけるインクナブラ調査の機会を得て、1925年の展示会で示された実例の数々を検証することができた。

本稿では、インクナブラの時代、すなわち印刷術が発明され伝播していった15世紀後半において、標題紙がどのように出現し発展を遂げたのかを、1925年展示会において使用されたインクナブラの実例を通して実証的に考察する。はじめに、文献研究を通してインクナブラの時代における書物変容の諸相を概観するとともに標題紙の重要性を確認する。次に、標題紙の出現と発展の様相を整理する。さらに、展示本として使用された個々のインクナブラを検証しつつ標題紙発展の具体的諸相を明らかにする。

## 2. 書物の近代化とその過程

20世紀後半は、コンピュータという新メディアが登場しかつ急激に普及した時期である。コンピュータによるコミュニケーション革命の直中において、研究者たちは、それが社会や人間に及ぼす影響に強い関心を寄せ始めた。情報社会の進展の先に何があるのかを予測することは困難である。そこで500年前に起こったもう一つのコミュニケーション革命、すなわち印刷術の社会的、文化的な影響について再考がなされるようになった。アナール学派のマルタンとフェーブルによる著作『書物の出現』は、それまで技術的な発展プロセスが重視されてきた書物研究に、印刷術を社会とのかかわりで捉えようとする「書物の社会史」という新境地を提示した。以後、アイゼンステインの『印刷革命』、プレッサーの『書物の本』、シャルチエの『読書と読者』などに代表される多くの書物史研究が行われるようになった。本章では、こうした種々の文献をもとに、インクナブラの時代におこった書物の変化について概観するとともに、標題紙の重要性について確認する。さらに、ニューベリー図書館のインクナブラ展示会の目的との整合性について言及する。

印刷術の出現は、それまで一人一人の判断に頼っていた書写の本作りに比べ、編集、修正、校合の手間を必要とした。他との競争に迫られたために、消費者が気に入るような工夫があれば、いち早くとり入れられた。印刷者たちは、自己の利益のために、宣伝として書籍一覧表や回報やちらしを発行し、また本の最初のページに会社の名前、紋章、住所をいれた。こうして、図書の体裁、すなわち、標題紙、目次、ページ、巻末索引、通し見出しなどが印刷者によって考案されていった。

書物の体裁が今日の姿に変わっていくまでには、それぞれの要素が定着し、洗練され、より発展を遂げる16世紀を経なければならぬ。しかし、印刷術が発明され伝播されていくインクナブラの時代は、印刷史の出発点であると同時に、書物の形態が写本から脱皮し現在の姿へと形を整えていく時期であったと見なすことができる。印刷術は書物を大量に世に送り出しただけでなく、書物の形態を一新したのである。

バトラーは、これを「文化の道具としての近代的な印刷本」の出発点として捉え、1925年の展示会目録の冒頭において、次のような解説を記した。

展示会の目的は、1501年以前に印刷された書物の数々を通して、文化の道具としての近代的な印刷本の起源と発展を示すことにある。(中略) 15世紀末までには約24,000種の印刷物が出版された。写本しかなかった時代の人々の多くが生存しているこの時期に、800万に近い印刷本が世に出回った。また、この短い期間に、書物の驚異的増加だけではなく、書物の物理的形態にも著しい発展が見られる。印刷本の特徴の多くは写本から引継がれたものである。しかし様々な新しい形式は、驚くほどの早く取り入れられ、試され、一般化されていき、16世紀初めには、書物は基本的な点で今日のものと同じく変わらなくなったのである。

このコメントは、バトラーがインクナブラの時期を印刷術の伝播の時期としてばかりではなく、近代的な書物の形成期として重視していたことを示唆している。

なかでも、特筆すべきは標題紙の登場であると言われている。初期の印刷本には写本と同様に標題紙は存在しなかった。しかし、今日では、タイトルや著者が明記された標題紙の出現によって、著述の責任所在は明確となり、印刷地、印刷者、印刷年までが一見で確認することができる。標題紙は、1475年から1480年にかけて登場し、現在のものとは異なる姿ではあるが、15世紀末になるとおよそすべての図書につくようになっていた。標題紙の一般化は、書籍一覧表や図書目録作りを容易にし、またそれ自体が広告の役目を果たした。このような理由から、標題紙は、「印刷本の形式に関する最も有意義で新しい特色」であり、標題紙の由来は「書物をたやすく参照できるような方法が発生し定着していくプロセスをはっきりと示す、一つの典型である」と見なされている。

展示会目録の内容を見ると、バトラーも標題紙の出現に強い関心を持っていたと思われる。1925年の展示会には、24の展示ケースに計109点（内9点は写本を含む）の書物が用意された。それらの作品は18のグループに分けられ、グループ毎に、写本、ゴシック活字体、ローマン活字体、イニシャル活字と段落、書物の価格低下、最初の印刷本、多様な活字体、標題紙の発達、地図、図形、図表、文法書・辞書、版画挿絵、語学学習書、小型化と便利な参照、主題分野、各国語、といった見出しがつけられた。

展示会の中でバトラーが強調したと思われる主題は標題紙の発達である。展示会の「標題紙の発達」という見出しのもとには、当該展示会の作品グループの中で最も多い18点のインクナブラが用意された。

興味深い点は、標題紙についてのバトラーの扱い方が、他の書誌学者達とやや異なっていることである。例えば、ストークス (Roy Stokes) は、フスト (Johann Fust) とシェーファー (Peter Schoeffer) の1463年の作品と、アーノルド・テル・エルネン (Arnold ther Hoernen) の1470年の作品を、事実上最初の標題紙であると見なしている。また、スタインバーグ (S. H. Steinberg) は、標題紙の発明者はシェーファーであるが、現在の標題紙に見られるすべての要素を含んでいるのは、ラトルト (Erhard Ratdolt) が1476年に出版した『天文・星占暦』(Carendarium.) の標題紙であると述べ、それを現在の標題紙の原型として評価している。

他方、バトラーは最初の標題紙として特定の作品名をあげることもなく、また展示した18点の作品について個々の解説を記すこともしていない。代わって18点のインクナブラ全体に対して次のような短い説明文を付している。

長い年月、書物の数量は少なかったために、標題紙が発達する必要性は生じなかった。しかし、書物量が増加するにしたがい、識別できるラベルが必要不可欠なものとなっていった。ここの2つの展示ケースには、近代的な標題紙の発達を示すために、当図書館が所蔵する1501年以前の印刷本のコレクションのなかから任意に選んだ一連の図書が展示されている。

このコメントには、個々の作品よりも、標題紙という一つの機能が生まれ発展してゆくプロセスに重点を置いていたバトラーの視点を見てとることができる。

### 3. 標題紙の出現と普及

今日の書物には、ほぼ間違いなく最初のページに著者名、タイトル、出版地、出版社名、刊行年などの書物の身元を確認できるすべての情報が記されており、その本を読むべきかあるいは自分には必要のないものかを手早く判断することが可能である。「写本と印刷本を区別する最大の要素」とも、「印刷本の最も有意義な形式」とも位置づけられている標題紙は、どのようにして出現したのであろうか。本章では、前章と同様、書物史関連の文献研究を通して、標題紙の出現とその普及の経過を概観する。

ごく初期のインクナブラには、写本と同じように標題紙が存在しなかった。写本では、第1ページの上部から本文が始まるが、その前に冒頭の文「インキピット：incipit」（ラテン語で「ここに始まる」の意味）が記されたり、あるいは簡単な巻末語「エクスプリキット：explicit」（ラテン語で「ここに終わる」の意味）が付記される習慣があり、そこに書物の内容や著者名が書かれることがあった。場合によっては、巻末に書名、時には著者名、写本の受け取り人や、稀には写字生の名や書写の日付や場所など、本に関する情報が記されることもあった。これは、「コロフォン：colophon」（奥書や奥付）とよばれる。インクナブラもこれにならって、末尾に著作のタイトルや著者名、印刷者名、印刷地、印刷日付等が記された。インキピット、エクスプリキット、コロフォンなどは書物の出所を確認する手がかりとなったが、しかし、いつも完全な情報が記された訳ではなかった。

標題紙は、印刷術が開始されてから10年ほど経た頃から徐々に付け加えられていった。印刷術が始まった当初、書物は製本されない状態で、本文が印刷された紙のまま取引された。未製本の書物の最初のページは痛みやすく、紛失の危険性もあった。そのため、1460年代後半には、本文の前に白紙が付け加えられた本や、あるいは第1葉の表ページ（recto）を白紙にし、裏側ページ（verso）から本文が印刷された本が作られるようになった。1480年代に入ると、書物の識別のために、その白紙に簡単な文字（ラベルタイトル）が印刷されるようになり、これが標題紙に発展していったと考えられている。

近年、インクナブラの標題紙についてスミスの興味深い研究が発表された。それは、最初のページが写本様式のものから、タイトル表記のある独立のページへと移り変わる様子を実際のインクナブラを調査することによって計量的に示したのである。はじめに、GW に収録された約28,000のインクナブラから4,200点を抽出し、それらの最初のページ形式を4つに分類し、その出現頻度を年代ごとに調べた。その結果は、①写本様式をとり入れ最初のページにインキピットと本文が記されたものが23.3%、②白紙のページが29.4%、タイトルの付記されたものは40.7%、その他

## 十五世紀ヨーロッパにおける標題紙の出現とその発展

(紛失や破損等で最初のページがないものや、インキピットやタイトルを含まない序文や図表など)が6.6%となっていた。

表1および表2は、それらを年代順に整理したものである(スミスの図を筆者が日本語に訳し書き改めている)。1460年代後半に白紙ページが登場し、1480-84年に急激に増加し、約60%に達した。80年代後半に、ひとたびラベルタイトルつきページが急激に増加を始め、それに反比例して白紙ページが減少してゆく様子が見て取れる。標題紙の有用性はインクナブラの後半期においてすでに異論の余地がないものとなっていたことが窺える。

文字だけのページにやがて木版画の絵が付け加えられるようになる。それは、徐々に図像と文字が木版画と一緒に組み込まれ、全体が一つの図案となった標題紙へと変化していった。15世紀末には、標章や寓意的な図像が描かれるようになり、図案も多様化していく。囲み飾りのついた標題紙、渦型装飾(カルトゥーシュ)で飾られた標題紙、建築物を図案とした標題紙などが現れて、複雑な図像の標題紙は、16世紀から17世紀にかけ大流行することとなった。

表1 標題紙の経年的な変化

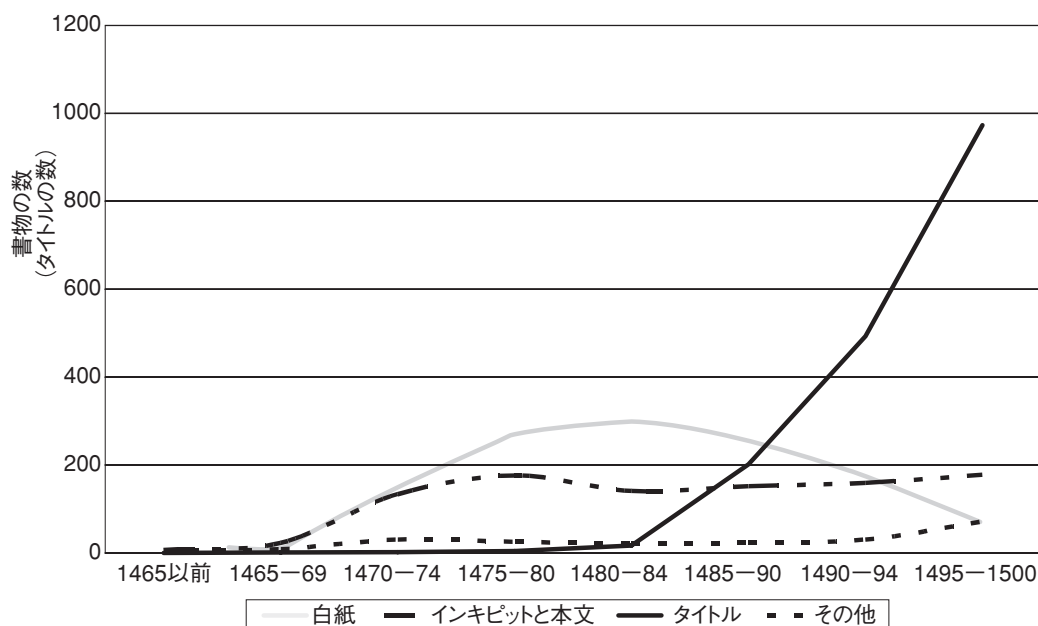




表2 ファーストページの形式とその数

	白紙	インキピット と本文	タイトル	その他
1465 以前	1	7	0	4
1465 - 69	11	23	1	8
1470 - 74	148	133	2	30
1475 - 80	267	176	4	25
1480 - 84	302	141	17	21
1485 - 90	254	152	201	23
1490 - 94	177	159	493	30
1495 - 1500	72	178	973	71

#### 4. 標題紙変容の具体的諸相

展示会では、バトラーの選出したインクナブラによってどのような書物変化が示されたのだろうか。標題紙の発達を示す展示の場では、前述したように、バトラーは個々の展示本への解説はつけず、一連の図書の全体について簡単な解説を記しただけだった。したがって、それぞれの展示本が何を示す例なのか、さらにはそれらを通して標題紙の発達がどのような形で示されたのか、残念ながら不明である。しかし、標題紙の発展が書物史上極めて画期的な出来事であるとするならば、バトラーによって解説されなかった個々の展示本から、それぞれの中に認められる具体的な痕跡を探りあて、それらの歴史的な意義について明らかにする必要があるだろう。

本章では、1925年の展示会において実際に展示本として使用されたインクナブラを再度結集し、それらを通してバトラーの示そうとした標題紙発達の具体的な諸相を明らかにする。展示会目録を除き、当展示会に関する記述が残されていないことは既に述べた。おそらく、実際の展示会では様々な要素、例えば展示会場の状況、展示ケースの大きさや数、展示ケース配置場所や照明の位置、展示順路などが考慮されレイアウトされたことであろう。したがって、インクナブラの展示順番と思われる展示会目録上の番号が、標題紙の変化の様子を編年的に示しているとは必ずしも言えない。しかし、他に展示会当時の様子をうかがうことができる有効な資料が残されていないことと、展示会の意図をできるだけ忠実に再現したいという思いから、できるだけ展示会目録に記された番号順にそって検討を加えることにする。

4.1 インキピットと本文の例：No.35は、インクナブラの初期のもので写本の体裁を受け継いでいる。写本のようにインキピットと本文が同一ページにあり、独立した標題紙はまだない。しかし、本文とインキピットの活字体のデザインや大きさが異なり、本文と書物の説明のための前文とを明確に区別する傾向が既に出てきていたことを窺わせる。

4.2 インキピットのみ例：No.36は、インキピットが、本文とは切り離された独立のページに



載せられた例である。文の形式や数行に及ぶ記述は、タイトルというよりも本文がないインキピットというほうが適している。

4.3 ラベルタイトルの例：No.37は、ラベルタイトルの例である。書物が大量に生産され頒布されるようになると、流通の過程で破損や汚れの危険性も多くなる。やがて、本文を保護する目的で本文の前に白紙のページがつけられるようになった。さらに白紙のページに簡単なラベルタイトルがつくようになる。ラベルタイトルも、1行型、ダイヤモンド型、行頭を揃えた数行の文章型など、いくつかのパターンがでてくる。これは簡素な1行のものであり、初期のラベルタイトルの例である。

4.4 木版画つきラベルタイトルの例：No.39は、木版画つきラベルタイトルの例である。初期の絵入標題紙では、タイトル文字と版画絵は別々に組み合わせられるので、木版画はまた別の書物に使われるというケースもしばしばであったという。

4.5 内容一覧つき標題紙の例：No.41は、内容一覧つき標題紙である。内容を簡単に示す習慣は写本の時代にも見られるが、写本時代には標題紙はなく、内容が標題紙上に記された写本の例はない。内容一覧は目次の前身とみなされることもある。No.44, No.48も参照。

4.6 印刷者商標：印刷者、出版者、書籍商などを識別する情報が付加されるようになる。多くの印刷業者や出版業者は、それぞれの専門の分野を持っていた。彼らはまた「黄金の太陽」とか「緑色のふいご」といった印象的な名のついた看板を自店に掲げ、時にはそれを商標として出版物の巻頭や巻末の余白に載せた。No.41最終ページはその例である。No.48は、1480年代にパリで印刷業を営んでいたマルシャン（Gui Marchant）の印刷者商標が標題紙の木版画上部に組み込まれている。

4.7 標題紙のデザインを利用して自分の店を広告する習慣が出てくる。No.45は、ラベルタイトルにルヴェ（Piere Levet）の印刷者商標がついている。彼はフランスの印刷業者で、1480年代後半に早くもこれを始めた一人である。1490年代には、この習慣は急激に増え、著者、タイトル、出版者が明記された標題紙の始まりとなった。こうしたマークも最初は、書籍商や印刷業者が取引先に書物を発送する際、運送業者に便利なようにと包みの上に描いた目印がそのまま使われ、はじめは黒字に頭文字を彫っただけの単純なものに過ぎなかった。しかし、コロフォンの後や最後のページの余白などに印刷されたこのマークは、やがて書物の出所を示すばかりか、書物を飾り、その質の良さを保障するための宣伝用イラストへと変身する。印刷者商標は、印刷業者や出版社を識別する役割を超えて本の質を保証し、さらには、一般読者に対して出版の権利を主張する役割を持つまでに発展してゆくのである。

4.8 書籍商と印刷業者の分離の例：印刷業が広く行われ始めると、書籍商と印刷業者の分離が起こる。より多くの資本を持つ印刷業者は印刷を外注し、自らは書物の販売や取引を主とするようになる。No.46は、大手書籍商が他の印刷業者に外注して作らせた書物の標題紙である。ページ一面にデザインされた印刷者商標は、印刷を行った業者フィリップ・ピグシェ（Philippe Pigouchet）

のものではなく、印刷を委託した書籍商シモン・ヴォストル (Simon Vostre) のものである。彼は、15世紀末から16世紀初頭にかけての時祷書を専門としていたフランス大手の書籍商兼出版者であった。

4.9 印刷者や出版者の権利主張の例：No.42, No.48には、「cum privilegio」(with privilege)と明記されている。著作権のない時代において、出版の権利を主張するものであり、著作権の意識へとつながるとの考えもある。No.42は、ラベルタイトルの発展的様式であるダイヤモンド型の例としても見ることができる。

4.10 出版権の公認の例：王侯や協会などの権力者から公認の出版権利を得て、さらに強い権利主張を行うようになる。しかし、公権力によるこうした特認制度は、権力者に出版認可を与える権限を集中させ、やがて出版統制や検閲を行うための有効な手段へと変化していった。No.51, No.52には出版の権利が公的に承認されたことを示す、“Nihil sine causa”が印刷年とともに付記されている。作品は、いずれも、16世紀の諷刺文学のベストセラーとなった『阿呆船』(*Das Narrenschiff*)を1494年に出版した、バーゼルの印刷者ベルクマン・フォン・オルペ (J.Bergmann von Olpe) の作品である。No.52ではオルペの名も記された。標題紙展示の最後の番号がつけられたこの作品は、初めの作品 (No.35) と比べると、今日の標題紙様式にかなり近づいてきていることがわかる。

## 5. おわりに

15世紀末になると、ほとんどの書物に標題紙がつくようになっていた。しかし、その姿は現在のものとは依然として異なっている。扉を飾ろうとする傾向は次第に強まっていき、イギリスやゲルマン諸国においては複雑な装飾の寓意画や象徴画などの流行がしばらく続いた。逆にイタリアやフランスでは、標題紙の体裁をすっきりしたものにすべく取り組む出版人も出てくる。彼らは新刊本のタイトルを簡略化して、後は著者名とページ下部の印刷・発行人の所在地だけを印刷している。結局、ローマン活字体とイタリック活字体の使用が各地に広がっていく中で、標題紙も徐々に今日のような体裁を整えてきたと考えられている。

標題紙は時代を反映する。たとえば、宗教改革のドイツにあっては、それはルター派を支える視覚的な手段になったといわれている。コーベット (M. Corbett) とライトバウン (R. W. Lightbown) は、「ルター派は図像に教理や論争上の意味をもたせる目的で、標題紙の図像を吟味して選んだ。その点において、ルター派宗教書と改革派聖書は、寓意画的標題紙のその後の傾向、つまりその図像表現が本文の単なる図解にとどまらなくなる傾向に先鞭をつけた」と論じている。今日、標題紙はシンプルで飾りのないものとなった反面、より詳細な出版情報が盛り込まれるようになった。例えば、初版から重版までの全履歴や、著作権者名、流通を迅速にする ISBN や、情報検索システムには不可欠の図書件名や分類記号などを盛り込んだ CIP データ (目録用データ :Cataloguing in Pub-

lication Data) などが付記され、情報社会の一端を反映するものとなっている。

今日の標題紙の原型は、幾人かの著名な印刷者や書籍商の発案の結果生まれたのではなく、15世紀の印刷工たちがそれぞれ何らかの理由によって自分たちの工夫と新しさを書物制作に取り入れたことの結果として生まれたものであり、その時代の産物といえるだろう。「コレクションの中から任意に選び出した一連の図書」というバトラーの言には、美しく装飾された標題紙を個々に示し芸術作品として賛美することよりも、印刷史上最も大きな変化といわれる標題紙の出現を、インクナブラに残された痕跡によって具体的に再現したいという思いが表れている。ニューベリー図書館の展示会には、15世紀後半に起こったそうした書物の近代化への様相が示されていたと同時に、標題紙を単なる書物の一形式としてのみ捉えるのではなく、社会との相互関連の中で捉えようとしたバトラーの視点を写し出すものであったと言えよう。

謝辞 本研究は、平成16年度及び17年度科学研究費補助金交付研究「20世紀前半のアメリカ図書館思想とその今日的な意義に関する一考察－メディア論から見るピアス・バトラーの書物観とその位置づけ」の一部です。研究に際して、ニューベリー図書館ウィング財団キュレクターのポール・ゲール博士、ならびに担当係員の方々には大変お世話になりました。ここに記して感謝の意を表します。

#### 注・引用文献

シカゴに1887年設立の人文科学・歴史学専門図書館。国立国会図書館の前身である帝国図書館（現：国立国会図書館国際子ども図書館）は、明治39年の創建時にはニューベリー図書館を建築上のモデルとしている。

若松昭子「ピアス・バトラーによる印刷史コレクションの形成－インクナブラの収集を中心に」、『図書館学会年報』Vol. 44, No. 1, 1998, p.1-16.

Towner, Lawrence W. *An Uncommon Collection of Uncommon Collections: the Newberry Library*. 2nd ed. Chicago, The Newberry Library, 1970. 34p.

若松昭子「インクナブラ・コレクションに見るバトラーの書物観」、『日本図書館情報学会誌』vol.46, No.4, 2001, p.143-158

主要な書誌事項のすべてを含む洋書の標題紙に対して、和書ではその役割は奥付が持っている。ここで言う標題紙とは洋書の場合に限定している。

分析書誌学についての詳細は、若松昭子「イギリスにおける分析書誌学の草創と発展－セントブライド印刷図書館を中心として」『図書館情報学の創造的再構築』勉誠出版、2001、452p. (p.168-179.)

*The Fifty Years of the Printed Book 1450-1500: Notes Descriptive of an Exhibition*. Comp. by Pierce Butler. Chicago, Newberry Library, 1925, 17p.

Febvre, Lucien; Martin, Henri-Jean. *L' apparition de Livre*. Paris, Albin Michel, 1958. 557p. (フェーブール；マルタン共著、関根素子ほか訳『書物の出現』築摩書房、ちくま学芸文庫、1998、全2巻)

Aisentein, Elizabeth L. *The Printing Press as an Agent of Change: Communication and Cultural Transformations in Early Modern Europe*. Cambridge, Cambridge Univ. Press, 1979. 2v. (アイゼンステイン著、別宮貞徳監訳；小川昭子ほか訳『印刷革命』みすず書房、1987、303、21p.)

Presser, Helmut. *Das Buch vom Buch*. 2. verb. Aufl. Hannover, Schluter, 1978. 243p. (プレッサー著

轡田収訳『書物の本』法政大学出版会, 1992, 377, 58p.)

Chartier, Roger. *Lectures et Lecteurs dans la France D'ancien Regime*. Paris, Editions du Seuil, 1982. 369p. (シャルチエ著, 長谷川輝夫; 宮下志朗共訳『読書と読者－アンシャン・レジーム期フランスにおける』みすず書房, 1994, 464p.)

前掲, p.5-6

前掲, p.79

前掲, vol.1, p.224

Stokes, Roy. *Esdaile's Manual of Bibliography*. 4.ed. London, Allen & Unwin, 1967. 336p (ストークス著, 高野彰訳『西洋の書物』雄松堂書店, 1967, 439p., 引用は p.29.)

Steinberg, S. H. *Five Hundred Years of Printing*. 3.ed. Harmondsworth, Penguin Books, 1974. 400p. (スタインバーグ著, 高野彰訳『西洋印刷文化史－グーテンベルクから500年』日本図書館協会, 1985, 433p., 引用は p.157)

前掲, p.11.

前掲, Vol.1, p.224-225

Smith, Margaret M. *The Title-page, its Early Development, 1460-1510*. London, The British Library, 2000, p.50

*Gesamtkatalog der Wiegendrucke*. Leipzig, Hiersemann, 1925-1968, 7Bd.

前掲 (19), p.49-50

2004年夏, 2005年夏のニューベリー図書館における調査では, 標題紙のテーマで使用されたインクブラ18点のうち16点を検証することができた。残り2点は, 紛失および番号改変との理由で閲覧できなかった。また, 展示会開催時にはインクナブラとして加えられていたが, その後, ポストインクナブラと判断されている図書が他に2点あった。しかし, バトラーが示そうとした近代的書物形成のプロセスを浮かび上がらせるためには, 当時の展示会の内容を可能な限り忠実に再現すべきと考え, それら2点も考察に加えた。ただし, 本稿では字数の制約もあり16点すべてについては取り上げていない。

Blasselle, Bruno. *Pleines Pages Histoire du Livre*. Paris, Gallimard, 1997 (ブラセル著, 木村恵一訳『本の歴史』大阪 創元社, 1998, 182p., 引用は p.63)

前掲, Vol.1, p.224, および前掲, p.94

前掲, Vol.1, p.310-312

Hirsch, Rudolph. *Printing, Selling and Reading 1450-1550*. Wiesbaden, Harrassowitz, 1967. p.83

前掲, Vol.1, p.226

Corbett, Margery; Lightbown, R.W. *Comely Frontispiece: the Emblematic Title-page in England, 1550-1660*. Middlesex, Routledge, 1979. 248p. (コーベット; ライトバウン共著, 篠崎実 [ほか] 訳『寓意の扉－マニエリスム装飾表題頁の図像学－』平凡社, 1991, 429p., 引用は p.14)

#### 参考文献

McKerrow, R. B. and Ferguson, F. B. *Title-page Borders used in England & Scotland, 1485-1640*. London, Printed for the Bibliographical Society at the Oxford Univ. Press, 1932. 234 p.

Pollard, Alfred William. *Last Words on the History of the Title-page: with Notes on Some Colophons and Twenty-seven Facsimiles of Title-pages*. New York, Franklin, [1971], 39 p.

Ve Vinne, Theodore Low. *A Treatise on Title-pages: with Numerous Illustrations in Facsimile and Some Observations on the Early Printing of Books*. New York, Haskell House, 1972. [1st ed. in 1901], 485p.

Grolier, Eric de. *Histoire de Livre*. Paris, Presses univ. de France, 1954. 34 p. (グロリエ著, 大塚幸男訳『書物の歴史』改訂新版. 白水社, 文庫クセジュ, 1992, 162p.)

インクナブラ図版一覧

インクナブラの書誌記述は、版の識別のために一般図書の場合と異なり極めて詳細に行う必要があるが、ここでは、使用したインクナブラを展示会目録の番号順に、著者、タイトル、印刷地、印刷者（又は出版社）、印刷年のみをごく簡略に記すにとどめた。

No.35: Plutarchus. *Apophthegmata*. [Unknown Printer, Venice, 1470].

No.36: Thomas Aquinas. *Quaternarius*. Paris, George Mittelhaus, [1493].

No.37: Reginaldetti, Petrus. *Speculum finalis retributionis*. Lyon, J. Treschel, 1494.

No.39: *Passio Domini nostril*. Basel, Michael Furter, [1500].

No.41: Augustinus. St. *Opus questionum*. Lyon, J. Trechsel, 1497.

No.42: Pomponius Laetus. *Compendium historiae Romanae*. Venice, Bernardinus de Vitalibus, 1498.

No.44: Le Fevre, Jacques d'Etapes. *Introductiones in diversos Aristotelis libros*. Paris, Gui Marchand, 1496.

No.45: Alanus de Insulis. *Doctrinale altum seu Liber parabolulm*. Paris, Pierre Levet, 1490.

No.46: *Le treite de discipline de divine amour*. Paris, Philippe Pigouchet for Simon Vostre, [1500].

No.48: Lucian Samosatensis. *Vera historia*. Venice, Giovanni Battista, of Sessa, 1500.

No.51: Lupoldus de Egloffstein. *Zelus veterum Germanorum principum in religionem*. Basel, J. Bergmann von Olpe, 1497.

No.52: Baptista Mantuanus. *De patientia*. Basel, J. Bergmann von Olpe, 1499.